

セルフスタディーを取り入れた日本語授業の実践  
～独学経験者から学ぶ～

A Practical Report on the Incorporation of Self-Study into a Japanese Language Course:  
What Can We Learn from Self-Taught Learners?

池田朋子, マギル大学  
Tomoko Ikeda, McGill University

「プロジェクト持ち寄り会」グループでは、まず4人の話題提供者が実践したそれぞれのプロジェクトについて発表し、そのあとグループに分かれての話し合いを行った。筆者からは、独学経験など多様な学習歴を持つ学習者が集まる日本語クラスで実践したセルフスタディープロジェクトについて報告した。

対象クラスは、2019年秋学期の初級ライティングコース（週3時間）、学習者数は独学経験者3名を含む15名であった。学習者はアニメや本など、何でも好きな題材を選び、自分の立てた計画に沿って学習を進めた。毎週の進捗状況を報告する週間レポートと、最終レポートを評価し、最終成績の15%に加えた。コース終了後に行ったアンケートでは、学習の計画に関するコメントが最も多く、「Consistentな学習方法を学ぶことができた」、「この経験は他の教科や将来にも役立つ」などの声が聞かれた。また、「教室の中で劣等感を味わうことなく弱点を強化できる」という一斉授業の問題点を窺わせる貴重なコメントもあった。

これまで独学成功者の学習方法を授業に取り入れたいと考え、ドラマや歌などを授業で扱ったことはあるが、レベル差の大きいクラスでは全員が一つの教材に取り組むことに無理があった。しかし、各自のペースで行うセルフスタディーでは、レベル差による問題は解消できる。また、独学経験者から学ぶべきことは自律性と継続性であり、それには本人の「やる気」が大いに関係する。そしてその「やる気」は選択をすることによって生まれる（青木 2001）ということはこの実践を通して強く感じた。

話題提供後のグループディスカッションでは、参加者の方々にこれまでに行ったプロジェクトを1つずつ紹介してもらった。今回のお土産となるグループごとのメモからは、様々な工夫に満ちたプロジェクトの概要を見ることができた。中でも、日本人のブログやビデオから単語リストを作って学ぶ、ブログの作成、ツイッターから使えそうなフレーズを収集するなどは、レベル差の大きいクラスにも対応できるものであり、今後ぜひ取り入れてみたいと考えている。

あるグループのメモに「やる気を出させる仕掛人になりましょう！」という言葉が残っていた。プロジェクトとはまさに学習者の「やる気を出させる仕掛け」であり、その仕掛人となることが教師の役割であるということに参加者の方々と共有できたことは、このセッションの大きな成果であったといえるだろう。

#### 参考文献

青木直子（2001）「教師の役割」青木直子他（編）『日本語教育学を学ぶ人のために』182-197 世界思想社